

回想わが道

フクビ化学工業相談役

八木 熊吉 ②

大正十四(一九二五)年一月二十二日が私の誕生日である。生家の八木熊商店は、福

井市大和中町二十七番地、現在

の春山一丁目で布海苔を商

つていた。その二代目当主

熊吉と清子の長男として生

をうけた。あとに子がなかった。なので一人っ子として育

た。

八木熊商店は初代熊吉が明治二十八(一八九五)年に創

業し布海苔の製造販売を生業としていた。布海苔は生糸の

けは立ちを抑え滑りをよくする。絹織物の製造工程にはないが

くはならないものだ。ちょうど日露戦争後の好況と第一次大戦の特需で福井県の羽

の中は活気にあふれていた。店の土間やいくつもの土蔵に

は板状に束ねたべっこう色の布海苔が積み上げられてい

た。すき間商品に似た特殊商品だったので各地から引き合

いがあり販売シェアは全国で

にまい進せよ」と教えたという。これは今も株式会社八木熊の社訓「十歩考え 一歩進んだら後悔するな」として伝えられ、私も信条としている。家業を全国規模に押し上げたのは父の二代目熊吉だっ

八木熊商店



布海苔を商っていた戦前の八木熊商店

布海苔販売伸ばし活気

た。

初代熊吉は「商売はよく考

えた末に決断し、一度決めた

ら後悔せず自信を持って一気

も厳しかった。私などは恐ろしくてなかなか話もできなかつた。しかしにっこり笑うととても優しい表情になる。その顔を見たくて言うことをきいたものだった。

父は福井中学時代に柔道初段、のちに五段を取った猛者

で、県柔道有段者会の会長も務めた。講道館の創始者嘉納治五郎が自宅に泊まったことも聞いている。半面とてもきばけたところがあり「福井の町にクマが出る」といわれるくらい料亭街の浜町では人気があつたらしい。

春山小学校へ入った私は、こんな環境に何の不思議も感じていなかった。昼になると丁稚さんが学校まで弁当を届けてくるような日常。つまり商家のぼんぼんとして何不自由なく育つたのだ。ところが

のちに一転地獄を見ることになる。

みらい・つなぐ・ふくい



福井新聞 110周年

回想わが道

フクビ化学工業相談役

八木 熊吉 ③

一九三八(昭和十三)年、好きだった。三年生のときに

私は福井市立福井商業へ進んだ。商人の子だから商業学校を卒業して家業を継ぐ。この道に何の疑問もなかった。当時の福井商業のグラウンドにも得意だった。

は走る、跳ぶ、投げるの体力賞検定で「上級」をもらった。全国で三人しかいなかったと聞かされて意外に思いながら

熊吉を襲名

順調な福商時代が急転したのは四年生になってからである。父である二代目熊吉が脳卒中で突然しくなった。働き盛りの四十一歳だった。仕事はもちろん社会活動でもまだまだやりたいことがあったに

違いない。幼いころから折に触れて「商売というのにはな」「布海」と聞かされい

ずれ大きくなったら父のあとを継ぐと思っていた。しかし父の死はあまりに早く、十六歳の私に心の準備などあろう

はずもなかった。

一人息子としてすぐに三代目熊吉を襲名した。本名は「勇次郎」というのだが、はじめのうちには大きな体にふさわし

すぎる「熊吉」という名前前に抵抗があった。ついては東京での学生時代のこんな話を思い出す。

風邪をひいて医者へ行き受け付けで名前を告げたところが「熊吉、あのクマの熊で

すか」と大声で聞くの「こちらだ。こちらはまだ若かったから顔から火が出るほど恥ずかしかった。

古川柳に「売り家と唐椽で書く三代目」というのがある。初代、二代と受け継いだ八木熊ののれんと名前を何としても守るのだ。次第にそんな気持ちになつていった。

た。その後しばらくはたとえ四〇度を超す熱が出てても下宿で布団をかぶって絶対に医者へは行かなかった。

同じようなことは学校で出席簿を読まれるときや軍隊の点呼でもあったが、どんな場合でも熊吉という名前を秘して本名の「勇次郎」を使おうなどとは思わなかった。

父の死を襲名した三代目熊吉福井商業時代の



父の死を襲名した三代目熊吉福井商業時代の

父の死を襲名した三代目熊吉福井商業時代の

いたのかも知れない。体格がよく運動神経に自信があった私は、身体を動かすことが大

父が急死、心の準備なく

古川柳に「売り家と唐椽で書く三代目」というのがある。初代、二代と受け継いだ八木熊ののれんと名前を何としても守るのだ。次第にそんな気持ちになつていった。

みらい・つなぐ・ふくい



福井新聞 110周年

回想わが道

フクビ化学工業相談役

八木 熊吉 ④

三代目熊吉を襲名したとは父親がいなかったからといって大業。次に適齢引き上げて徴兵検査を受けて甲種合格。同年十月に早稲田大学商学部に進学するもすぐに応召となつた。私はこれまで通り商業学校の生徒として勉強と運動に日々を費やし、やがて卒業時期を迎える。そんなある日、母に呼ばれ「大学へ行ってくれ」といわれた。思いがけない言葉だった。

大学そして戦争

前に書いたが、商人の子は商業学校を出て家を継ぐのが当たり前。自分もそんなつもりでいたからだ。母は、夫たる父に従い店には一切顔を出さず奥を取り仕切る古いタイプの女性だった。その母が意を決したようにいったのだ。「おまえは一人息子だし、

大学へ行きたい気持ちがない訳ではなかった。

早稲田の専門部商科に入学したのは太平洋戦争が始まった翌年の一九四二(昭和十七)年である。しかし戦時下というので四年には繰り上げ卒



大学早稲田で過ごした戦時下時代。日比谷公園で学友と

た。戦況が厳しくなるなか大学の先輩たちは学徒出陣で明治神宮外苑から戦地へ赴いていた。いずれは自分も思っているなら海軍へと考えていたが長男は採らないというこ

任務である。みんな「この手で祖国を守るんだ」と意気に燃え激しい訓練に明け暮れた。そしてあの終戦の日を迎える。半ば覚悟はしていたものの、虚脱感と喪失感、これから日本はどうなるんだらうとしばらくは何も手につかず、考えられなかった。

このあと見習士官に任官し松本の部隊に配属された。日本の敗色が濃厚になった翌四年、部隊は独立混成旅団として再編され今度は横須賀に駐屯することになった。敵の本拠地を防衛するのが

大学入学以来、東京での生活は二年余と短かった。戦争の最中で落ち着いて勉強に打ち込める環境ではなかったがそれでも若い身に都合暮らしは楽しく、故郷を離れた解放感もあって充実した日々を過ごした。かけがえのない友も得た。

進学すぐ応召、日々訓練

みらい・つなぐ・ふくい



福井新聞 110周年

回想わが道

フクビ化学工業相談役

八木 熊吉 ⑤

ら始めた。そのうちに出征していた社員たちが戦地からほつぼつ復員して、また二十一歳と若い当主の私に手を貸してくれた。これで勇気百倍。

とりあえずバラックで店や倉庫を建て、以前の取引先である機屋さんを一軒一軒訪ね

彼ら駐在員は別名「くさ」といった。戦国時代その土地に根付いて情報を収集した忍びの者を「くさ」といったが、

一九四五(昭和二十)年十月、敗戦に打ちひしがれて福井に戻った私の目をとらえたのは一面の焼け野原だった。福井が空襲に遭ったことは耳にしてある程度は覚悟していた。しかし目の当たりにする光景は想像をはるかに超えていた。

焼け跡に立つ

あとで知ったことだが二万

二千世帯、約八万五千人が焼け出され、人口当たりの被災率は九三%と、空襲を受けた全国の都市の中でも福井市は最も高かった。八木熊の店も倉庫も、そして自宅もみな無残に焼け落ちていた。



米軍の爆撃で一面焼け野原になった福井市街

若さと、体力には自信があったので、九州などを駆け回り、がむしゃらに商売に没頭した。しかしこれがいけなかつた。ある日鮮血を吐いた。当時はまだ不治の病といわれた結核である。即入院。絶対

母のことが心配で疎開先の東郷の実家へかけつけた。祖

仮店舗建てて復興に没頭

た。四十七年十月のことである。

みらい・つなぐ・ふくい



福井新聞 110周年

回想わが道

フクビ化学工業相談役

八木 熊吉 ⑦

震災から立ち直りかけたところで胸を患って入院。そして震災や震災は福井の人ならだれもが体験したことだが、私の場合、病気だけは余分だった。無理を押して退院したものの、バラックの店も、完成間近だった倉庫も焼

けていた。

倉庫には二、三日前に入荷したばかりの片栗粉や白ロウなど布海苔の加工剤が大量に保管してあった。これも全部灰になった。過酷な現実を前にして「今度こそ何もかもなくした」と立ち尽くすしかなかった。

何より困ったのは、帳簿類を焼いてしまったことだっ

た。お得意様にどれだけの品を納め、どれだけの売掛金があるのかわからない。担当者

の記憶やメモが頼りの集金は困難を極めた。逆に八木熊への請求書は容赦なく届けられ

た。申し訳ない。病気を抱える身でまさに絶体絶命のピンチだった。

のれんを守る

こちらの窮状を汲んでくださる取引先もあつたが、甘え

てばかりはいられない。さりとて払える金がない。このままでは八木熊はどうなるのか。三代でつぶしたら祖先に



八木熊商店はすべての原点であり、布海苔はその主力商品

被害をもたらした。したがってこの地域のお得意様である機屋さんは大きな痛手を受けた。しかしその他の地域のお得意様は無事で、これが救い

だった。

なかには「八木熊さんからこれだけ買っていたので」と、見舞い方々わざわざ支払の信用の基盤になったのだと思う。

いに来てくださる人もあつた。このときばかりは、人の情けと神仏のご加護を思っ泣いた。

戦後、人絹を中心とする繊維産業はガチャ万時代を迎えていた。織機がガチャンと動けば万のお金が転がり込むといわれ福井産地も活況を呈

した。それからというものの時間はかかつたものの仕入れ先を

同時に、初代と先代が汗と努力で築き上げた信用の大きさを今さらながら痛感した。それからというものの時間はかかつたものの仕入れ先を

「八木熊」はすべての原点

「八木熊」はすべての原点である。震災、病気、震災などあの短い間に降りかかった困難が鍛えてくれたからこそ今日の私があるのだと思う。

みらい・つなぐ・ふくい



福井新聞110周年

回想わが道

フクビ化学工業相談役

八木 熊吉 ⑧

一九五〇(昭和二十五)年、

私はようやく健康を取り戻して反動不況を呼んで、福井の回復宣言をした。翌年、旧制早稲田大学最後の卒業試験が行われ、二十六歳で卒業証書を手にした。卒業までは応召。その後敗戦、発病、震災と青春時代を翻弄され卒業などあきらめていただけに心底うれしかった。

福井ビニール創業

卒業試験は、死線をさまよってシベリアから帰還したばかりの級友二人も一緒だった。そのとき迎えてくれた主任教授の言葉が今も忘れられない。「君たちはこれまでま

さに生きた勉強をしてきた。本を読んで学んだ学生より早い勉強をしたのだ」と。

朝鮮戦争による好況はやがて反動不況を呼んで、福井の興衰というプランで、この話が福井青年会議所に持ち込まれた。同会議所は全国二番目に早く早さで誕生したばかり

維と並ぶ第二の産産を地場に興そうというプランで、この話が福井青年会議所に持ち込まれた。同会議所は全国二番目に早く早さで誕生したばかり



福井ビニール創業当時の従業員たち。みんな意気に燃えていた

り。私もその一員だった。

人絹を利用して何かできないかと話し合っていると、県商工課がレーザー加工はどうかと、機械をあっせんしてきた。

高山県で既に一部製品化されていたので早速見本を取り寄せた。それは厚手の繊維の上面に塩化ビニル樹脂を加工したものであった。

これならそう難しくはない。当たれば人絹在庫が一掃できるし、県が後押しすると思うのだからやってみよう、ということになった。若い面々は意気に燃えていた。しかし今になって思うと何とも危

十一人の役員は全員青年会議所のメンバーで、たまたま理事長だった私が代表取締役になった。こうして福井ビニール工業株式会社は産声を上げた。五三年五月二十五日のことである。

産業振興の意気に燃え

みらいつなぐふくい



福井新聞 110周年

回想わが道

フクビ化学工業相談役

八木 熊吉 ⑨

本社を置いた福井市木田町付近には当時まだ震災の焼け跡が散見された。福染興業の倉庫を借りスプレッターという機械を据えて早速試作に取りかかった。人絹に捺染した色柄は塩ビ樹脂を透かしてそれなりにきれいに仕上がった、と思った。

苦難の船出

ところが二、三日すると樹脂の表面が縮んできた。おまけに変色して、上を歩くと靴の跡が残るではないか。床材として売ろうとするのだからこれでは話にならない。それでも何とか改良して心当たりで見本を持ち込んだ。

しかし製品をひと目見ただけで、どこの取扱店からもい

べもない言葉が返ってきた。「だめ」。たしかに大手のレザー製品と比べると明らかに見劣りがした。売り込みに回る社員はみな肩を落とし暗い表情で帰ってきた。このとき

社が特許を持つビフロを作るなら製品は全部引き取る」というのだ。できたばかりの名もない町工場には願ってもない話だった。

ただ、ビフロの好調は一年と続かなかつた。日本経済は朝鮮戦争の特需のあと一転して不況に見舞われ、翌年の一九五四(昭和二十九)年夏にはビフロの生産は中止に追い込まれた。従業員は一人去り二人辞めて六、七人しか残らなかつた。

福井ビニール木田工場
の全景

短い間とはいえともに汗を流した従業員をそのまま路頭に迷わせるわけにはいかならぬ。相談した結果、二人の役員が自分の経営する会社に身柄を一時引き取ることになつた。福井ビニールの事業が再び軌道に乗ったら戻るとい

不況直撃、生産中止に

みらい・つなぐ・ふくい



福井新聞110周年

回想わが道

フクビ化学工業相談役

八木 熊吉 ⑩

ビフロの次に考えたのは押出成形だった。早速中古の押出機を買い込んで塩化ビニルの透明管を作った。試作には成功したものの、当時はまだ国産の透明安定剤が開発されていなかったので量産できなかった。

危機から黒字へ

そのうちに一九五五(昭和三十一年)六月、第二期の決算を迎えた。結果は百五十一万円の欠損を計上し二年続きの赤字。支払手形も四百七十六万円で達した。不渡りを出したら福井の産業人として再び立ち上がれなくなる。まさに存続のときである。みんな青

部から次の手形を渡される。そのまま汽車に飛び乗ってまた別の取引先へ向かうなどということが何度もあった。

このとき、県内外の少なからぬ人たちが快く手形の期限

それからというものの役員総出で手形のジャンプ依頼にかけ回った。私など朝に大阪へ出かけて期限延長をお願いし、やっとの思いで戻ると、福井駅で待ち構えた幹

さて、買い込んだ押出機で次は何をつくるか。思案しながら歩いていると、金物屋の店先で建築用のジョイナーが目についた。板と板の接ぎめを隠すための金属製の用材である。これなら塩化ビニルで押出機を使ってできるのではないか。

試作品をつくって福井市内



途がついたころ。日綿ビルの前で

の建材店などに持ち込むと、今度は手こたえがあった。金物の原材料が高騰して業界が苦しんでいたときだった。ただ単価が安いので、大口の注文を取るしかない。紹介もあり、販路を求めて私は東京へ出かけた。

幸い三友工業という大手建材会社から「五千本預からせてもらう」という話をいただいた。き、勇躍して帰福した。これがきっかけで五年の末にはレールなどの製品がそろい、建材用品メーカーとしての態勢はようやくやくにしてスタートラインについた。

わが社がこの分野でトップバッターだったこともあって売り上げは順調に伸びた。大阪に営業拠点を置いたことでさらに勢いづき、創立四年目で念願の黒字経営に転換することができた。あまりのうれしさに思わず皆で万歳三唱したものだ。

みらい・つなぐ・ふくい



福井新聞110周年

建材用品の開発で活路

回想わが道

フクビ化学工業相談役

八木 熊吉 ⑪

ナベ底不況が岩戸景気に転じた三井化学とその系列会社である日本トレーディング社が出資、協力してくれることになった。ところが、この計画を役員会に諮ったところ大反対に遭ってしまった。予想

それでも当時の私は、プラスチック産業が将来必ず発展すると確信し期待していた。いろいろな経過があり、結局無条件協力というかたちで両社の資本参加を得て初志の通り大阪への進出を果たした。振り返るとこの決断が大きなターニングポイントだった。なぜ大阪なのか。理由はこ

重要拠点になる。

翌六〇年四月に稼働した工場では、樹脂の特性を生かしてゴムタイヤの感触を出した「ソフトA(エース)」を生

にさらに有力な商品がほしい。私はそのとき床に敷く尺角サイズの塩化ビニルのタイヤを考えていた。

外の展開だった。

「やっとここまでできたのに大資本の下に入ったら取り込まれてしまう」というのだ。

「考え方が違うのなら我々の株を引き取ってほしい」とま



大阪工場の完成披露パーティー

うである。お得意様であるメーカー側との交渉に地の利を得られる。原料や製品の輸送コストが軽減できる。しかも大口需要家の協力を得やすい。何より情報収集が容易で、四国、九州、および中部地方への販売網拡充の

すでに大阪の化学会社が製品化し、当社ブランドの「フクビ・タイヤ」として売り出して

「勝手に風呂敷に包

躍するための布石である。かねて原料の取引関係にあ

塩ビタイヤの生産拠点

本日から応援部隊を送り込んだ。彼らが出発する朝は職長や同僚が福井の駅頭で「がんばってこいよ」と見送った。まるで出征兵士を送るような光景だった。

みらい・つなぐ・ふくい



福井新聞 110周年

回想わが道

フクビ化学工業相談役

八木 熊吉 ⑬

東京オリンピック後いったん冷え込んだ日本経済は、間もなく高度成長にさしかかると考えていた。「いつまでも下る。GNP(国民総生産)が世界第二位になったのは一九六八(昭和四十三)年である。消費面ではカー、カラーテレビ、クーラーが家庭に広がり

私はかねて総合プラスチックメーカーへの脱皮が必要だとして工場のようなことをしてはいけない。自社でしかできない新製品を積極的に開拓しなければ」とまず開発室

持帰った技術に本社独自の技術を学ぶために担当常務と研究部長を同社に派遣した。

の工夫を加えて六六年には特許も取得済みだった。その後高度経済成長や3C時代の到来は私の予測の範囲をはるかに超えるものだったが、いろいろと手を打ってきたことがそのころようやく実を結び始めていた。

である。

営業面は好調で六九年四月から同十月までの三十期は前年同期比で経常利益は約七〇%増を達成した。製品の種類も増えて多岐にわたりようやく総合プラスチックメーカーへの足がかりを得た思いだった。

3C時代

特にカラーテレビは五年ほどで生産六百万台を超えるさまざまな普及だった。なかでも日本住宅にマッチして高級感のある家具調が人気を博した。この波は当社にも福音をもたらした。それまでの木製に代わってプラスチックのキャビネットが重用されたので

を置いた。六三年には西独の押し出しメーカーであるショック社と技術提携契約を結んでいた。同社は木工業者としてスタートしており、当時は塩化ビニルに木目を印刷する優

な下、体育大会など深めた感を一社員を通じて



など深めた感を一社員を通じて

木目柄や重厚なダークブルーの色調が消費者の好みに合っており、大量生産による安定供給と価格面がメーカーのニーズにも合った。松下電器が売り出した一世を風靡したテレビ「嵯峨」などは当社製品を使用した代表例

樹脂の総合メーカーへ

と社名を変更した。世界への飛躍と株式上場を視野に入っていた。

みらいつなぐふくい



福井新聞 110周年

回想わが道

フクビ化学工業相談役

八木 熊吉 ⑭

大正十四(一九二五)年生、大分県から工場までを歩かれない。細かいことま
まれの私の年齢は昭和の年代で県と相談しながら準備し
と同じである。共に歩んだ昭
和は私そのものであり、人一倍その時代に対する愛着が強
いと自負している。だから、好の秋晴れだった。午前十時
いと自負している。だから、十分、到着された両陛下に私
和は私そのものであり、人一倍その時代に対する愛着が強
いと自負している。だから、十分、到着された両陛下に私
いと自負している。だから、十分、到着された両陛下に私

和は私そのものであり、人一倍その時代に対する愛着が強
いと自負している。だから、十分、到着された両陛下に私
いと自負している。だから、十分、到着された両陛下に私
いと自負している。だから、十分、到着された両陛下に私

昭和天皇ご視察

その昭和天皇と皇后両陛下を当社にお迎えしたときの緊張と感激は今も忘れられない。一九六八(昭和四十三)年の十月三日のことだった。福井国体秋季大会の開会式に臨席された機会に県内を
て「プラスチック産業は将来性豊かな大切な産業であるの
で、今後一層の努力と発展を期待します」とのお言葉を賜
った。
このあと私が先導して会社

の玄関から工場までを歩か
れた。両脇には全社員が出
てお迎えした。実は、前もつ



昭和天皇と皇后両陛下をお迎えして、お言葉をいただいた

て何度かお出迎えの練習をしたのだが、社員たちは背筋が伸びていなかったり、手をだらりと下げていたり、どうなることかと心配していた。

しかし本番では違った。全社員が一糸乱れず整然とお迎え

することができた。「ああ良かった」。私は心から安堵した。同時にわが社員を大いに見直した。お迎えの列には母の姿もあった。早くに父を亡くした私は、最大の孝行ができると思つて母をその席に招い

た。母は斎戒沐浴し紋付きに威儀を止して長時間立ってお待ちした。あとで聞くと「光栄で身体が震えて頭を上げる
ことができません、お顔を拝見できなかった」といっていた。
工場では天皇陛下はタイル製品について「火に強いかね」とお尋ねになった。一瞬、火
に対してなのか熱に対してなのかと迷ったが「発火点は五
〇〇度以上で、耐熱といふこ
とでは軟化点は七六度でござ
います」と二通りお答えした
のを覚えている。

ご視察になる日程が組まれ、当社も指名された。何しろ初めてのことだ、どうしてよい

全社員でお迎えし感激

緊張の連続だったが、その天皇陛下が崩御されてもう二十年。「昭和は遠くなりけり」である。

みらい・つなぐ・ふくい



福井新聞110周年

回想わが道

フクビ化学工業相談役

八木 熊吉 氏

昭和四、五十年代。起伏はあったものの社業は順調に推移した。一九七三(昭和四十

八)年の石油ショックも総力がかかった。市場調査をして戦でしので、かえって売り上げを伸ばした。とりわけ三方町(現若狭町)に設立した系列会社フクビミカタプラスチック工業の貢献が大きかった。

海外進出

その後あのプラザ合意があり、円高誘導によって日本経済は国境のないポーターレス世界経済のただ中に放り出されることになる。総合プラスチックメーカーを目指す私はそのとき海外展開を模索していた。

ヤーブの冷蔵庫部品に当社製品が採用されたことで、同社は初めて海外に足跡をしるし

次は巨大市場アメリカである。そのころフクビ製品の対米輸出は、相手先ブランドに



行った地鎮祭を招いて現地のタイ工場

よるOEM対応だけだった。「何とかアメリカに拠点を」と考えていたところへ、今度も家電メーカー数社から現地の生産を強く勧められた。私にはひとつの戦略があった。アメリカは生産と同時に市場の動向を探り先端技術の流れを知るアンテナ。タイは豊富な労働力を生かした生産基地。日本のフクビ本社は知識集約型の製品開発担当。三カ国によるトライアングル構想である。九六(平成八)年、オハイオ州ヒューバーツ市に用地を求め「フクビUSA」

これを建て直すのに私も現地に乗り込んだ。毎朝七時には出勤して陣頭指揮を執った。社員と一緒に「自炊生活」で、ハンバーガーもよく食べた。幸い何でもおいしく食べられる丈夫な胃袋をもっていたので少しも苦にはならなかった。

「フクビUSA」はその後増資を行い、五年目に黒字転換。現在も黒字基調を続けている。

家電部品の基地求めて

タイ進出のきっかけは八六(昭和六十一年)年だった。シ

回想わが道

フクビ化学工業相談役

八木 熊吉 ⑬

企業を立ち上げ育てる立場なら、自社の株式を市場に公開して社会的評価を得たいと思うのは自然なことである。その意味で一九九七(平成九)年三月十二日は、私にとってフクビ化学工業という企業にとっても忘れられない日である。

上場果たす

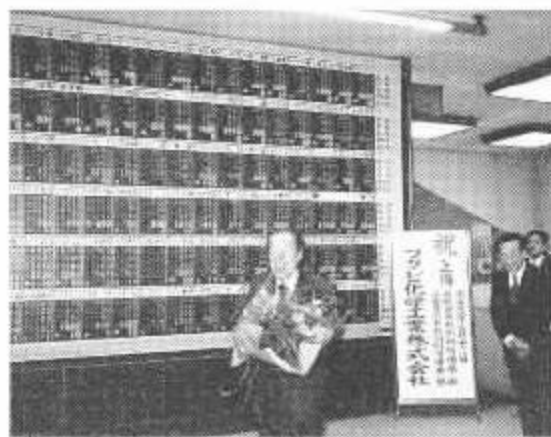
当社株式を大阪証券取引所と名古屋証券取引所の二部に

て提出した。

上場し、公開することができた。大阪での初値は確か千七百八十円だった。数字うんぬんよりも、福井ビニール工業を設立して以来四十四年をへてやっと投資家の前に出られたという感慨で胸がいっぱいになったのを思い出す。

実はこれよりかなり以前にの核がなければ……。それに開発力が弱い。私は提出済みの書類を取り下げて捲土重来を期すことにした。

このあと開発部門を東京に移して「製台開発はマーケットに学べ」と号令をかけた。その後、社員の奮闘もあって製品の多角化ができ、企業として厚みを増したと判断したので、もういいだろうと再び株式の上場を思い立ったのである。



念願の株式上場を果たして
ボードの前で

私はよく社員たちに次のようなことを言ってきた。「楽観的な赤字部門を持つのはよいが悲観的黒字はいけない」と。これは私の造語なのだが経営の基本に通じるところにある。

意識すると、一時的な黒字つまり発展性のない黒字に甘えていたら進歩が止まりたちまち赤字に転落してしまう。順調なときにこそいつ襲ってくるかもしれない赤字に備えなければならぬ。逆に赤字でも展望を持って今を耐えれば悲観的結果にはならない。

株式の上場は、こんな私の理念を理解し努力してくれた多くの力の結晶だと思っている。以来、市場の厳しい評価にさらされて企業としていくらかたくましくなった。社会的責任も自覚するに至ったと自任している。

進化続けた努力の結晶

みらい・つなぐ・ふくい



福井新聞 110周年

回想わが道

フクビ化学工業相談役

八木 熊吉 ⑬

プラスチックの可能性には、板を無数の宇宙線が通過するとして永久に残るのでいつで計り知れないものがある。こと、その部分に飛跡が残る。も取り出して確認できるといれまでの研究開発と進化の過程で理解していたつもりだ。帰還してからこの跡を分析すれば、宇宙放射線の量や高いエネルギー、種類などデータもあってあらかじめ実感したのを探集することができる。

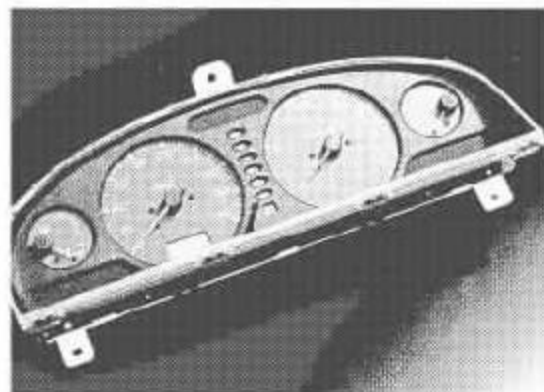
は、フクビ製品が宇宙での実験の一翼を担わせていただいたときだった。

実験は、ホウネンエビの卵

宇宙実験一役

一九九二(平成四)年に打ち上げられたスペースシャトル「エンデバー」には初の日本人宇宙飛行士として毛利衛さんが乗り組んでいた。このとき一緒に当社の放射線検出材「ハーツラスTD-1」が

や枯草菌胞子などの生物試料を入れたスチレンフォームをハーツラスでサンドイッチ状にし、これが受けた放射線を測定する方法で行われた。測定結果はハーツラスに飛跡



階のものを含めて千六百枚のハーツラスを納入した。「エンデバー」に先立って打ち上げられた「デイスカバリー」やその二年後に女性宇宙飛行士向井千秋さんが搭乗した「コロンビア」でも実験に用いられた。

フクビからは、実験準備段

ハーツラスは、放射線を溶

びた樹脂の分子がどのような傷を受けたかを拡大し、さらに顕微鏡で観察するというミクロの世界。樹脂基板にはじめから傷があったのでは役に立たない。つまり分子レベルで全く欠陥のないものをつくらなければならない。当社の研究陣は開発までに苦心さんたん約二年を要した。同種のもの、原発などで働く人が身につけ、今では全世界で放射線量の測定などに使われている。

素人が手探りで始めた福井ビニールの製品が宇宙実験のお役に立てるまでになった。感慨もひとしおである。もちろんここで満足して留まっていられない。このほど開発したハイブリッド塩ビは石油使用率を最大限抑えた製品。これら資源と環境を考慮した製品提供は今後の大テーマだと考えている。

反射率低・透明度高
バネも使われている
プラスチック自動車
ハーツラスは自動車で

同製品は特殊な透明プラスチック板でできている。この

新素材研究開発の成果

みらい・つなぐ・ふくい



福井新聞110周年

回想わが道

フクビ化学工業相談役

八木 熊吉 ⑱

社業の傍ら長い間、地域や各種団体のお手伝いをさせていただいた。専門外のことも多かったのですが、お役に立てたかは分からない。しかし私にはかけがえない経験となり糧となった。そしてたくさんの知己を得た。

会の確保と消費者利益の保護。何度も調整を重ね、苦勞の末に結論を得たときは正直ほっとした。このあと「ベル」とJR福井駅前を含めたいわゆる「三極時代」が現出する。一九八五(昭和六十)年、

福井会議所

その一つが福井商工会議所での仕事である。特に副会頭時代の大型店開設に伴う調整は思い出深い。今はない「ピエ」が一万九千平方メートルの店舗面積をもって設置申請を行った。私は商業活動調整協議会の会長として任に当たった。

市橋督さんのあと第十六代会頭をお引き受けすることになった。会議所は多くの懸案を抱えていたのでまさに身の引き締まる思いだった。まず会員の増強に取り組み、引き継いだ時点で六千百十三人だった

たのを退任時八千八百八人にまで増やすことができた。

もう一つの大きな仕事は新商工会館の建設。以前の商工会館は現在の福井市役所別館で



福井商工会議所会頭として福井祭りの時代行列で柴田勝家氏に扮した

ある。オフィス街の中心に位置していたが駐車場がなかった。車社会でこれは致命的欠陥といつてよく、とかく評判が悪かった。おまけに手狭だった。駐車場問題を検討したところ

、現在地では無理という意見が大勢を占めた。ほどなく、記念事業としてこの際移転新築しよう、と話は一気に膨らんだ。

現在、県国際交流会館が建つ知事公舎の敷地、その知事公舎が移転した市有地などの多角トレードがま

とまって、敷地は福染興業跡の現在地に決まった。パブルがはじける前だったため建設資金集めは比較的スムーズに運んだ。各方面のご協力には今も感謝している。

完成した新商工会館はインテリジェントビルとして情報化時代に対応するものになった。しかし私はその完成を待たずに身を退くことにした。「新しい酒は新しい革袋に」との思いからである。

商工会議所ではこのほか福井空港の整備に取り組んだがこれは残念な結果になった。北陸新幹線の実現には今も熱い思いがある。

新商工会館建設に感慨

時、全国屈指の広さだったため市内商業界に衝撃を与えた。周辺小売り業者の事業機

みらい・つなぐ・ふくい



福井新聞 110周年

回想わが道

フクビ化学工業相談役

八木 熊吉 ⑱

結婚は一九五七(昭和三十)年。妻幸子との間に二男二女を授かった。家族を思う気持ちは人後に落ちないと思

っているが、これでなかなか敵格な面もあるらしい。息子と娘。男女を分け隔てしたつもりはない。しかし二人の男の子には怖い父親だったかもしれない。

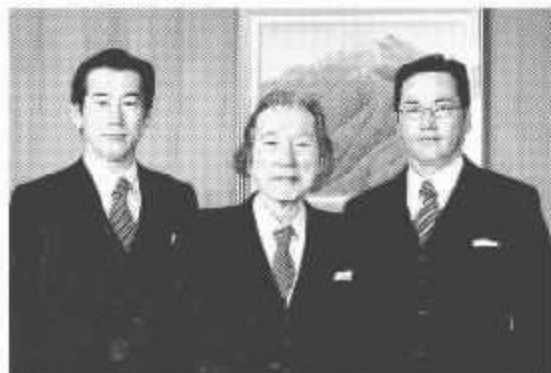
バトンタッチ

それは私が、二代目熊吉の父を早くに亡くしたこと関係がないとはいえない。私にはのれんを引き継ぐという十分な心の準備がなかった。だから私の息子たちには幼いころからそれとなく言い聞かせてきた。

こんなことがあった。座卓を運ぼうとした息子がぶつけ

に引き継ぎたい。これは偽らぬ親心である。

しかし社会的存在である企業の経営者に盲目的な親心は



フクビ化学は長男誠一郎(右)に、(株)八木熊吉は二男信二郎(左)に後を託した

許されない。まず株主や仕入れ先、お得意様、社員に対する責任を考える。有名な能の理論書「風姿花伝」で世阿弥は「跡取りといえども不器量な者には奥義を伝えるな」といっている。全く同感である。

長男の誠一郎が二十八歳になつたときフクビ化学の取締役にしては、私のあとを引き継いだにしようとした。私が福井ビルを創業した年齢である。それから四年間じつと観察し、周囲がその器量を確認するようになったの

にしようとした。これは代々受け継いだ精神でもある。それで長男には「誠」の字を、二男には「信」と社長を譲ることになった。未熟な二人だが、誠実と信用を忘れず企業人として社会的責任を果たしてほしいと願っている。

誠実と信用を引き継ぐ

みらい・つなぐ・ふくい



福井新聞 110周年

回想わが道

フクビ化学工業相談役

八木 熊吉 ㊦

亡き母清子は信心深い人だった。その影響を受けたのか

私も若いときから神仏や自然に対して畏敬の念を抱き続けしてきた。今の自分が在るのは決して独りの力ではない。生かされているのだ。こんな思いが、齢を重ねるにつれていよいよ強くなってきた。

この心境は、早くに父を亡くしたこと。戦災や震災で何もかも失ったこと。病気で生死の境をさまよったことなど、無縁ではないのだろう。事業で金策に窮し途方にくれたこともあった。そのたびに多くの人に助けられた。このほか人知の及ばない大きな力を感じることもこれまでに

何度となくあった。

本社・工場の移転先に現在の福井市三十八社町を選んだのは、秦澄大師の生誕地であり、ゆかりの寺のあることが理由の一つである。大師の徳

寿 康

に導かれたからこそ今日の私やフクビ化学が在ることは疑う余地がない。

社長現役の時代から長い間、新年の元旦に続けてきた習慣がある。早朝に家族ともども秦澄寺にお参りすることだ。

大師の前に頭を垂れ手を合わせる。すがすがしくも敬虔な気持ちになる。このあと神明神社と自宅近くの氏神様にも出向いて手を合わせる。

さらに、これは日常のことだが、朝出社するときは太陽に向かい、帰宅途中に月が出

ていけば必ず手を合わせる。「森羅万象すべてに神仏が宿っておわす。おごることなかられ」。いつもこんなことを自分自身に言い聞かせてきた。

八木家は浄土真宗だが曹洞宗大本山永平寺の奉賛会会長を長く務めさせていただいて、こんなご縁もあって、事業で迷いを感じたとき何度か永平寺に足を運んだ。九十歳で亡くなられた熊沢禅師にはよくしていただいで、そ



熊沢禅師の「寿康」の教えは、自問自答の胸に刻み込まれ、自ら問うて

の教えは今も胸の内にある。禅師はよく「寿康」という言葉を書にされた。長命といふのは単に生き永らえることではない。たとえ短い命でも、また志半ばで倒れるとも自ら高く掲げた理想や目標、信念に向かって努力し、一歩でも前進したら、これこそまさに長命といふべきだ。これが禅師の教えだった。八十路を越えた自らの来し方を振り返り、「寿康」といえるだろうか。と自問するこのころである。

理想高く掲げ努力する

「おわり」

（次回は、元経済企画庁長官・平泉渉氏です）

みらい・つなぐ・ふくい



福井新聞110周年